マイコプラズマ肺炎 （金沢医療センター：小児科）

北國新聞
2007年（平成19年）8月11日（土曜日） 社会2 （40）

丈夫がいいね ■331

第7部 子ども健康学

マイコプラズマ肺炎

咳と熱が続けば疑って

前回の百日ぜきと同様、発症例が多いにもかかわらず特定しにくい医者泣かせの病気は他にもある。風邪の初期症状によく似た、咳と熱が出るマイコプラズマ肺炎である。

風邪薬効かず

先月下旬、激しい咳と三九度近い熱が出た金沢市内の男児（二〇）も自宅近くの病院で風邪と診断された。しかし、処方された薬を飲んでも熱は下がらず、咳はひどくなるばかりだった。

マイコプラズマ肺炎は、ウイルスと細菌の中間に位置する微生物「マイコプラズマ」が原因であることからこの名がついた。患者の咳やくしゃみで飛沫感染し、肺などに入り込むと炎症を起こして咳や熱が二週間ほど続く。十五歳未満の子どもがかかりやすい。

単なる風邪と思いこんだ親は、治してやりたい一心で一般の風邪薬を飲ませる。しかし、マイコプラズマ肺炎には効かないのである。

幸いなことに、マイコプラズマ肺炎にかかっても命にかかわることは少ない。症状も通常の肺炎に比べて軽く、特効薬といえる抗生物質も開発されている。

それだけに、病気の早期特定が重要になる。「おかしいな」と思ったら、マイコプラズマ肺炎を疑ってみることが早道だろう。

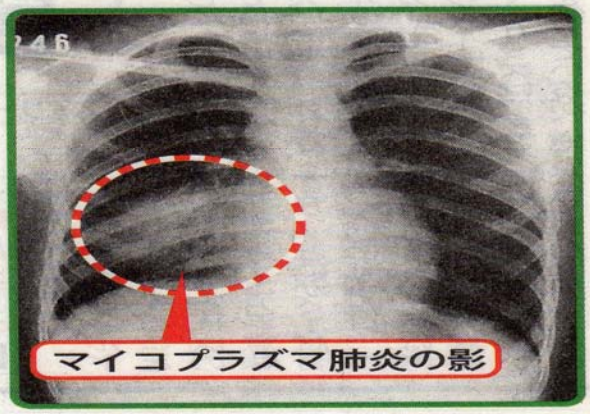
先の男児は症状が改善しなかったため、発症から六日後に金沢医療センター（金沢市）を受診し、マイコプラズマ肺炎と診断された。右肺のレントゲン写真に特有の影が写り、抗体検査で陽性だったからだ。太田和秀小児科医長から処方された抗生物質を飲むと翌日には熱が下がり、一週間後には咳も軽くなった。

しかし、マイコプラズマ肺炎には「特効薬」はあっても、現時点で感染を防ぐ手立てがないのが難問となっている。だからマイコプラズマ肺炎と分かったら外出を控えよう。集団感染の「感染源」となり、他人に迷惑をかける恐れがあるからだ。

外出は控えて

この肺炎は症状が比較的軽いため、患者が歩き回って病原体をまき散らす傾向にある。「歩く肺炎」とも呼ばれるゆえんである。太田医長は「はっきりした基準はないが、熱が下がっても一、二日は外に出ないようにしてほしい」と説く。

五日以上たっても咳や熱が治まらなかったらマイコプラズマ肺炎を疑い、専門医にかかる。治療後に熱がひいても、集団感染を引き起こさないためにしばらくは外出を避ける。病気を知ることが早期治癒と感染防止につながるのである。



金沢医療センター提供